

醍醐寺五重塔文様 解説

《キーワード》醍醐寺 五重塔 彩色文様

百橋明穂

五重塔初層内部の建築部材には床を除いて、すべてに彩色が施されていた。心柱覆板、四天柱や側廻り連子窓裏板、腰羽目板については、「両界曼荼羅」と「真言八祖像」が描かれており、絵画としてすでに報告済みである。文様彩色としては、側柱、頭貫（両側面および下面）、内法長押（側面および下面）、側柱上台輪（側面および下面）、四天柱上台輪（両側面および下面）、繫台輪（両側面および下面）、また側廻りの開閉部では冠木長押（側面および下面、両端）、楣（側面および下面）、方立、幣軸（平坦部、曲面部）、連子窓額縁に見出され、また天井には、天井板、支輪板、支輪、格縁、辻飾に文様が施されている。

基本的には白土下地に型紙を用いて上から押筋をつけて文様を写し、ベンガラ線で下書きし、彩色を行なっている。さらに文様部分には現在は白色に見えるが、当初は密陀僧の淡黄色線でもって輪郭線としていた。奈良時代のように朱線による輪郭線ではなく、また平等院のような白線でもない。現在確認された顔料としては、暖色系では赤として、朱、鉛丹、ベンガラ、また黄色として、密陀僧、

金がある。寒色系では、緑は若緑青、青は黄土を藍で染めた代用群青である。その他白では下地としての白土と鉛白、黒は墨である。彩色顔料を指示したと思われる書き入れが天井板から見出された。「丹」と「子」の文字である。天井板の宝相華文の赤色に関する指示で、花卉の赤部分を丹で彩色するものと、「子」すなわち紫土と呼ばれるたと推定される、紫色を呈するベンガラを用いることを指示したものと解釈されている。しかも天井板の宝相華文様の配置から、緑の花芯に対して、丹を用いた内側の花卉、および青色の外側の花卉のタイプと、青の花芯に対して、やや紫っぽいベンガラを用いた内側の花卉および緑の外側の花卉が交互に隣接してあったことが判明した。すなわち寒色の青、緑に対しては朱、丹の赤と紫土とされるベンガラの赤の二種類が対応している。奈良時代の配色原理である赤（朱）と緑、橙（丹）と青の組み合わせとはやや相違しているが、青に赤、緑に紫との組み合わせは必ずしも未だ成立していない。しかし寛平四年（八九二）の慈尊院如意輪観音像台座蓮弁の場合には、紺と丹、緑と紫の組み合わせがすでに用いられ

ており、さらに後の天喜元年（一〇五三）の平等院鳳凰堂ではいわゆる「紺丹緑紫」の配色が完成する。醍醐寺五重塔の場合では、彩色原則で見る限り未だ過渡期にあったとみてよい。

醍醐寺塔内の彩色文様には際だった形態上の特徴がある。すなわち文様の種類が限られることである。文様は、すべて植物文で、側柱の大円唐草文を除いて、ほとんど宝相華文と蓮華文に限られる。

まず宝相華文の形状については、大半の部材は宝相華文による装飾であるが、各部材ごとにその宝相華文には微妙な形状の相違がある。しかしその一つの部材においては統一されており、すなわち台輪には台輪の宝相華文、長押には長押の宝相華文、貫には貫の宝相華文である。別の部材に用いられた異なる文様パターンが混入することはない。ただし一つの部材のなかでは、東西南北での微妙な彩色の組み合わせによる変化をつけている。

この宝相華文は植物文としての蔓や蔦、茎の部分がなく、花芯と花弁、弁葉とが緊密に纏まりあった文様の単位を構成した、特異な形状であることを特色とする。奈良時代の唐草文や宝相華文に見る植物としての花や葉の翻りや重なり合った自然な表現から、デザイン的な無機質な植物文様へと変化する傾向が看取される。さらに貫や台輪、長押などの横材の中央に幾何学的な条帯文と珠文が走り、ほぼ三段の縹縷、外から内にむかって色が濃くなる、いわゆる正縹縷で表わされる。

このように一見機械的な文様の構成に見える塔内彩色文様も、実は配色と文様配置にかなりの工夫がなされている。ことに長押や貫、台輪などの横材では宝相華の配置を下面と側面とでは交互に位置を

分けている。すなわち側面では中央と両端に宝相華文が、しかも中央には独立した宝相華文を、両端には半切した宝相華文を置き、下面では側面の宝相華文の間に独立した宝相華文を配置して、重なり合わないようになっていいる。また同じ横材の宝相華文でも、中央にある宝相華文の花芯と両端にある宝相華文の花芯とは色を逆にする。しかも塔内のすべてがこの原則ではなく、東西南北の方位によって配色の組合せを交替させる。幾何学的に見える彩色にも意外な工夫によって変化をもたらしている。たとえば内法長押側面では東西が同一の配色に対し、南北がそれに対応する。また鳥居長押側面では東北対南西であり、台輪下面では東北対南西である。

宝相華文は基本的には中心部分に正面向きの蓮華文や四弁花文を置き、その左右に斜向蓮華文や斜向五弁花文、横向五（三弁、七弁）弁花文、斜向多弁花文が続き、あるいはこの間に弁葉文が挿入される場合もある。そしてさらに先端部分の弁葉文ないしは弁花文に続いていく。いずれにせよ、ほとんどの宝相華文はほぼこの三段構成の文様単位である。弁葉文の葉は先の丸くなったものと、先端が尖ったもののほか、先端が反って翻るものがある。また先述したようにこの弁花文と弁葉文の間にはまったく蔓や蔦、茎がなく、重なり合いによって大きな宝相華文が構成される。これは奈良時代の唐草文、宝相華文とは大きく異なり、また一方で平安時代後期の平等院鳳凰堂のものとも相違する。唯一蔓によって大きな唐草を構成したのが、側柱の唐草による大円団花文である。斜向・横向の花文と翻る葉を蔓で繋ぎ、しかも弁葉文の先からは巻ひげが延びている。これは仁和寺藏宝相華迦陵頻伽蒔絵冊子箱（延喜一九年〔九一九〕）

にも見る文様で、奈良時代とは一線を画す、平安時代初期に伝わった中唐期以降の文物の新しい影響によるものとされる⁵⁾。内法長押と鳥居長押の下面の宝相華文はこれまでのものとやや趣を異にし、中央に今までにない正面向の四弁の瓜文状の芯を置き、その四周に薬をみせる斜向の菊花文を配し、先端には斜向の蓮華文を置く。途中に弁花文や弁葉文などはなく、豪華な花だけで構成し、さらにその花文は暈かしを用いて彩色されている。このような花芯の薬を大きく飛び出させた花文は塔では心柱覆板北面に描かれた胎藏界中台八葉院の天鼓雷音如来の左上方に見出され、さらに「兩界曼荼羅」の金剛界中の一印会・理趣会の界帯などに見ることができると特徴的な文様である。

天井部は天井板、格縁の辻飾、また支輪板などは中心に正面向四弁花文を置くのを基本とする。辻飾は四弁花文のみで、天井板ではその四周に横向五弁花文を置いて、菱形を形成する。支輪板では花弁の接合した五弁花文を置いて菱形をなしている。さらに心柱覆板額縁ではこの菱形を半切した形と全形とを交互に置いて、あたかも立涌文のようにしている。連子窓額縁では中心の正面四弁花文の四周の横向五弁花文を端渦五弁葉文に換えているが、同様に半切形を交互に置いている。

全体的に見ると、醍醐寺五重塔内部装飾文様は基本的には宝相華団花文を主とし、植物文様としての蔦唐草や宝相華唐草から、文様単位がいくつかのモチーフに整理され、意匠化された優美なものとなっている。蔓や蔦といった幹茎のまったくない宝相華団花文が特徴で、奈良時代の植物文としての唐草宝相華文とも、また平安時

代後期の平等院の宝相華文とも異なる。一方で唯一の蔦唐草文である側柱では、平安時代初期にはじまる唐草の先端から巻ひげが延びており、時代的特色のある繊細な文様である。しかしやや形式化した文様パターンに変化を与えたのは、むしろ微妙な彩色や文様配置の組み合わせである。部材の側面と下面では文様を交互に配置し、また地色と花文の彩色とを東西南北の位置によって逆にするなどの工夫が見られる。そこに華やかな豪華さはないが、優美で繊細な装飾的效果が特徴といえる。

なお天井板には格縁が当たって隠れる部分に先述の「丹」・「子」のように彩色を指示したもののほか、筆ならしの絵や文様、平仮名や片仮名による和歌の一部などの落書きがあり、特に仮名文字は年代の確定する資料として国語学上重要視されている。⁶⁾

註

- (1) 高田修編『醍醐寺五重塔の壁画』昭和三十四年 吉川弘文館
有賀祥隆「五重塔初重壁画」(『醍醐寺大観』第二卷所収)
- (2) 上野アキ「装飾文様」(前掲『醍醐寺五重塔の壁画』所収) 昭和三十四年 吉川弘文館
山崎一雄「彩色顔料」(前掲『醍醐寺五重塔の壁画』所収)
京都府教育委員会文化財保存課「国宝建造物五重塔修理工事報告書」昭和三十一年
- (3) 森政三「醍醐寺五重塔建築装飾彩色」(文化財保護委員会編『醍醐寺五重塔図譜』所収) 昭和三十六年
- (3) 奈良時代から平安時代の建築装飾彩色や装飾文様については次の論考があ

る。

『正倉院の絵画』昭和四十三年 日本経済新聞社

井上正「金堂の文様」(『奈良六大寺大観』第十二卷「唐招提寺 一」所収)
昭和四十四年 岩波書店

秋山光和「八角堂の装飾画」(『栄山寺八角堂』所収) 昭和二十五年 国立博
物館

山崎一雄「金堂板絵及び金堂諸仏の板光背の彩色」(『大和古寺大観』第六卷
「室生寺」所収) 昭和五十一年 岩波書店

西川新次「観心寺如意輪観音像について」(『美術史』二二号) 昭和三十一年
『日本彫刻史基礎資料集成』平安時代重要作品篇 三 昭和五十二年 中央

公論美術出版

秋山光和・柳澤孝「慈尊院弥勒佛像台座蓮弁の装飾文様」(『美術研究』二八
三号 昭和四十八年

『日本彫刻史基礎資料集成』平安時代造像銘記篇 一 昭和四十一年 中央
公論美術出版

(4) 山崎昭二郎「彩色装飾」(『平等院大観』第一卷「建築」所収) 平成十年 岩
波書店

(5) 栗田美由紀「宝相華迦陵頻伽蒔絵冊子箱の文様について」平成十四年 美術
史学会第五回全国大会

(6) 伊東卓治「初層天井板の落書」(『醍醐寺五重塔の壁画』所収) 昭和三十四年
吉川弘文館

(付記) 本稿は『醍醐寺大観』第一巻建築・彫刻・工芸(二〇〇二年一〇月
岩波書店)五重塔の「五重塔建築彩色」解説である。二〇〇一年夏に五重塔
内の建築彩色の調査にあたって、各方位、各部位、各部位毎の詳細な資料を得たので
あるが、紙面の都合で割愛された。調査には神戸大学文化科学研究科助手木村
展子及び大学院文学研究科入江多美が同行し、資料整理にあたった。以下の
資料は入江多美が作成した。